

母乳と薬

母乳は栄養や免疫など様々な面において、赤ちゃんにとって最適な栄養とされています。また、授乳は大好きなお母さんを一番近くに感じられる最も安心な時間でもあります。お母さんと赤ちゃんのために UNICEF や WHO（世界保健機構）などを中心に、世界的に母乳育児推進のための様々な取り組みがおこなわれています。

お母さんの服薬による赤ちゃんへの影響に関しても様々な研究が行なわれていますが、まだ統一された情報にはなっていません。最近では、産科・小児科医以外でも母乳栄養の重要性が再認識され、「お薬飲むなら授乳はやめてね!」と安易に指導されることは減っていると思います。しかし、現在日本で使用されている薬の添付文書の 3/4 に「服用中の授乳は避けること」と書かれているため、医師や薬剤師によって指導内容も一定せず、お母様たちを不安にさせてしまうことも多いようです。また逆に「授乳中でも大丈夫だよ」と言われ処方されたお薬でも、何となく不安になり自己判断でお薬を控えてしまい、症状が悪化してしまうお母さんもいます。

最近では、母乳栄養がお母さんや赤ちゃんに与える様々な素晴らしい効果が、授乳期間に比例することが知られており、2歳までは母乳栄養を継続することが勧められています。

お母様たちがいつも安心して授乳できるように、授乳中の服薬のポイントをお伝えしたいと思います。

授乳中の服用ポイント

お薬にはそれぞれの特性があり、母乳を介して赤ちゃんの体内に吸収される量は様々です。最近の研究によりこの詳しい特性がわかっているお薬はたくさんあります。医師に授乳中であることを伝え、よく相談のうえ処方してもらいましょう。

お母さんが風邪や、アレルギーなどで体調不良の場合、授乳以外の育児にも影響します。

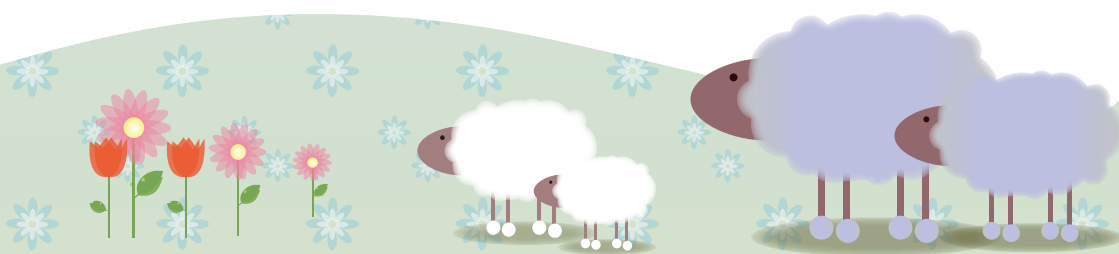
風邪が長引くとお子さんにうつしてしまう機会も増えます。お薬が必要と判断された場合には、治るまでしっかり飲み続けましょう。

母乳から風邪のウィルスがうつることはありません。

一般的にお薬の母乳中の濃度は内服後2時間くらいで最も高くなります。したがって、内服の直前に授乳すると、より赤ちゃんへの影響が少なくなります。

1歳以降は通常母乳の分泌量が減ります。母乳に含まれるお薬の量は、もちろん母乳の量に比例するので、1歳以降ではお子さんへの影響は更に少なくなります。

>> 裏面へ



風邪以外のホルモンの病気や、長期間の治療を必要とするような病気の場合でも授乳が可能なお薬はたくさんあります。一部の抗がん剤も授乳可能です。

妊婦さんや、授乳婦さんのお薬に関する相談外来をおこなっている施設もありますので、そういった施設を利用するのもよいでしょう。

漢方薬の中にも刺激の強い生薬を含んでいるものがあります。“漢方なら安全”というわけではありませんので、やはり医師とよく相談してください。

不必要なサプリメントなどを控えることも重要です。

市販の風邪薬や解熱鎮痛剤にはカフェインなどの添加物が入っていることがあります。カフェインは少量なら赤ちゃんへの影響はないとされていますが、コーヒーやその他の食品にも含まれているため、普段のお母さんの食生活によっては、赤ちゃんに影響が出る可能性があります。薬の必要性も含め、やはり医師に処方を受けるようにしましょう。

市販薬のなかでも、ビオフェルミンなどの整腸剤や、点鼻薬などの局所に使うお薬は一般的に安全です。

妊婦さんと授乳婦さんでは服薬に関する注意点が異なります。妊娠中の方は妊娠時期もお薬の選択に影響するので、産科の先生に相談するとよいでしょう。

2010年10月

自由が丘メディカルプラザ 小児科

<http://www.jiyugaokamp.com/s>

TEL : 03-5731-3565

